

【58】黄河堤防の人為決壊

昭和 12 年 7 月（1937）、中国の北京市郊外の永定河に架かる盧溝橋の近くでの日本軍と中国軍の衝突に端を発し、日中戦争が始まりました。

日本軍はまたたく間に北京、天津をはじめ黄河北側の華北一帯を占領し、翌、昭和 13 年（1938）には黄河を渡って華中に進攻しようとしていました。劣勢の中国軍は日本軍の進攻を阻止しようと黄河の右岸側の堤防を破壊し、折から雨期にさしかかり増加してきた黄河の流水を氾濫させました。場所は河南省の省都、鄭州（チョンチョウ）の北方の京水鎮というところで、河口から 550km くらいの地点です。

黄河は天井川で河床は堤内地より高いので、ひとたび破堤して河川水が堤内側へ流れ出ると、破堤地点に築堤して締め切り、元の河道に流れを復旧するのが難事業なのです。黄河の南側の華中の地域では集落や農地が浸水したり、広がりながら右に左に乱流する新しい河道になったりして大きな被害を生じました。

北側（左岸側）の華北の地域では浸水こそありませんでしたが、破堤箇所から下流の黄河が涸れて取水できなくなり、広大な農地が水不足のため乾燥化し、一部は砂漠化するなどその被害面積は 300 万 ha にも達しました。こうして浸水と干害により黄河の南北合わせて数十万人の死者を生じたといえます。

華北の日本軍占領地の行政を行うために“華北政務委員会”なるものが“南京政府”の下部機関として設けられました。この組織の“建設総署”は土木建設の部局ですが、黄河の災害復旧を進めるため、技監として招聘されたのが内務省名古屋土木出張所長だった田渕寿郎氏です。田渕技監は昭和 17 年から敗戦の昭和 20 年まで 3 年にわたり尽力したのですが、何しろ戦時のことで日本軍と中国軍（共産ゲリラを含め）の戦闘があり、資材も不足していたので工事は完成しませんでした。

その後、昭和 22 年になって、中国（中華民国）の手により締め切り工事は完成し、黄河の流れは元の河道に戻りました。蒋介石が共産党に負け現在の中華人民共和国が成立する 2 年前のことです。

田渕氏は帰国した昭和 20 年に名古屋市に奉職され、当初、技監、後に助役として戦災で丸焼けになった名古屋市の戦災復興事業を実行し、100m 道路を設けたり、市内墓地の郊外への集団移転を行ったことでその名が知られています。

（注）南京政府とは、蒋介石の中華民国に対抗して日本側の援助の下に反蒋介石派の中国人政治家が創った“カイライ政権”ともいうべきもの。